

「リトル・グレイ・ラビット物語」の誕生：「妖精物語」としての動物ファンタジー

著者名(日)	中野 節子
雑誌名	Otsuma review
巻	26
ページ	43-54
発行年	1993-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00004318/



「リトル・グレイ・ラビット物語」の誕生 ——「妖精物語」としての動物ファンタジー——

中 野 節 子

マンチェスター大学で物理学を修めた第二番目の女子学生であり、後に数々の動物ファンタジーやタイム・ファンタジー、そして自然エッセイの書き手として活躍した英国の女流作家アリソン・アトリー（Alison Uttley: 1884-1976）の誕生のきっかけをつくったと思われる、「リトル・グレイ・ラビット物語」の最初の4つの作品を取り上げて、アトリーの動物ファンタジーの魅力を探ってみたい。

1. 『りすと野うさぎと小さな灰色うさぎ』（*The Squirrel, The Hare and The Little Grey Rabbit*, 1929）

A long time ago there lived in a little house on the edge of a wood, a Hare, a Squirrel, and a little Grey Rabbit.

The Hare, who wore a blue coat on weekdays and a red coat on Sundays, was a conceited fellow.

The squirrel, who wore a brown dress on weekdays, and a yellow dress on Sundays, was proud.

But the little rabbit, who always wore a dress with white collar and cuffs, was not proud at all. . . .¹⁾

冒頭から、森の外れの小さな家で共同生活をする、それぞれ種類を異にした三匹の動物の特徴がはっきりと描かれている。うぬぼれの強い野うさぎのハアー、おすまし屋のりすのスクワール、そしてちっとも気取りのない灰色うさぎのリトル・グレイ・ラビット、「グレイ・ラビット物語」の主人公たちの誕生である。この第一作から、その後亡くなる前年、1975年出版の『ハアーと虹』（*Hare and the Rainbow*）に至るまで、46年間にわたる作家生活

の中で、アトリーは35冊の同種の物語を、シリーズものとして出版している。面白いことには、これらの物語に登場する動物たちは、その種類がそのまま彼らの名前となっており、自然界における特徴もほとんど変更なく保たれていることである。とくにこの三匹の主人公たちの名前は、野うさぎ(Hare)、りす(Squirrel)、そして小さな灰色うさぎ(Grey Rabbit)というふうに最初から固有名詞化されているのである。いかにも不思議な組合せの、三種類の動物たちによる共同生活である。しかもうぬぼれ屋のヘアーも自慢屋のスクワールも、ほとんどぶらぶら遊んで暮らしており、日常生活の細々したことは、全てこの小さなグレイ・ラビットが取り仕切って営まれているのである。

朝早く、牛乳屋のはりねずみのヘッジホグ(Hedgehog)と郵便配達人の胸赤ロビン(Robin Readbreast)がやってきて、村の周辺のニュースを伝えてくれる。動物村の住人にとっての脅威は、いたち(Weasel)やてん(Stoat)やきつね(Fox)の出没とその動向であった。この物語においても、二人の情報通の口から、近辺にいたちが出没したとのニュースがもたらされ、早くも事件の前触れがなされている。

ヘアーの大好物の人参を、農夫の畑に取りにゆき、あやうく捕まりそうになったグレイ・ラビットは、何とか自分の手で人参の栽培をしようとする。困ったことや分からないことの解決は、全て森の賢者フクロウ(Wise Owl)に相談することになっていた。彼は、栽培のためにはまず村の雑貨屋で、種というものを手に入れる必要があると教えてくれる。グレイ・ラビットは喜んでそうしようとするが、情報はただでは得られない。代償として彼女は、ふさふさとした自分の尻尾をフクロウに差し出さねばならず、尻尾はフクロウ家のノッカーとなって、戸口にぶら下げられてしまうのである。おまけに家に帰ったグレイ・ラビットは、勝手な二人の共同生活者たちに、見苦しいとか恥ずかしいとかと散々に非難される始末であった。

ある日のこと、グレイ・ラビットの留守中に、ヘアーとスクワールはイタチに襲われ連れ去られてしまう。はさみとロープと杖をもって、グレイ・ラビットはすぐに救出にむかった。彼女の勇気ある行動と賢い決断によって、二人は無事救い出され、イタチはかまどで焼かれてしまうというお話しになっている。すっかり懲りて、日頃の自分たちの言動を後悔した二人がグレイ・ラビットに、これからは自分たちの代わりに暖炉の側でロッキングチェ

アーに座り、朝食も寢床に運んで行くのを待っていてよいと言われると、

“I don't want to lie in bed, I like to work, and I don't want toast and coffee, but I should like to sit in the rockingchair sometimes, and I should like a party.”²⁾

と答えるグレイ・ラビットであった。

このロッキングチェアといい、ホームパーティーといい、英国の田舎の生活に不可欠の道具と習慣が、小さなグレイ・ラビットの好物としてあげられているのが分かる。

慎ましく、謙虚な働き者のグレイ・ラビットのイメージは、こうして小さな読者の心に刻まれることになった。ここで大きな力のあったのは、アトリーの文に添えられたマーガレット・テンペスト (Margaret Tempest: 1892-1982) の挿絵である。全部で26枚使われているそれぞれの絵の愛らしさと初々しさは、イギリスの田舎の光と風の様までもしのばせてくれるような、暖かい色調と明確な線のなかに留められて、子供たちの目を楽しませ、アトリーの言葉による描写をより鮮明にイメージ化する際の助けとなっている。どの絵も紙面一杯に描き込まれるというのではなく、四角や丸といった枠組みの中に描かれていて、見る者はあたかも額縁のなかを覗き込むごとく、それぞれの窓枠を通して場面に入り込んでゆけるといった趣向がとられている。このテンペストの提案による紙面構成と四角い版型の本づくりもまた、きわめて新鮮なものであったといえよう。間もなく、物語を離れてこれらの愛らしい挿絵が、グリーティングカードやキャラクター商品として一人歩きすることになり、後々の作者と挿絵画家の間の確執を生んだことも、容易に理解できるのである。

2. 『どんなふうにして、リトル・グレイ・ラビットが尻尾を取り戻したか』 (How Little Grey Rabbit Got back Her Tail, 1930)

処女作出版の翌年、同じくハイネマン (W. Heinemann) 社より、テンペストの挿絵入りの第二作目の物語が世に出ることになった。題名が示しているように、人参栽培の仕方を教えてもらうための代償として、フクロウ賢者にとりあげられた尻尾を、グレイ・ラビットがどのようにして取り戻したか

を説明する物語となっている。三匹の主要な主人公に加えて、「グレイ・ラビット物語」の新たな名脇役の一人もぐらのモルディー・ワープ (Moldy Warp) が登場して、大活躍ということになる。モルディーがローマ時代の古い銀貨を使って、やさしい音色のするベルを作り、ドアーノッカーとして使われていたグレイ・ラビットの尻尾と交換してもらうことができたからである。けたたましい音は大嫌いなフクロウ賢者も、「花のような形をしていて美しい。それに、この世の始めから存在していたため賢くもある。」(“It is beatiful, for it is like a flower. It is wise, for it lived in the beginning of the world.”)と³⁾、このモルディーのベルが大いに気に入った。こうして賢者フクロウは、グレイ・ラビットのふわふわの白い尻尾を、スティッチ草の糸で固定し、セント・ジョン草の膏藥をぬって、元の位置に付けて返してくれたのだった。

物語の冒頭は次のように始まっている。

One cold March morning little Grey Rabbit awoke at dawn for this was to be a busy day.

Softly she opened her door and listened. SnORES could be heard coming from Hare's room, and squeaky little grunts from Squirrel's.

She crept downstairs, took down a round wicker basket and then went out into the raw air.⁴⁾

なぜ今日が忙しい日なのかは、すぐに分かることになる。風邪を引いたヘアーのために、桜草のワインを作ろうと、まだ日が昇らないうちに沢山の桜草を集めなければならなかったからだ。赤いハンカチーフで頭をしぼり、テールクロスで肩をおおい、くしゃみばかり繰り返すヘアーの情け無い姿をなんとかしてあげなければと優しいグレイ・ラビットは心配する。森にはどうやら風邪が流行っているらしく、フクロウ賢者の鳴き声も、「ほーほー、くしゃん！」(“Too-Whit, A-Tishoo!”)と異常を示している。「あの人にも、桜草のワインーびん届けてあげなくちゃならないわ」と毛布を引上げて、ベッドに横になりながらも考えるグレイ・ラビットであった。森中の動物たちのことを心配するお母さんの様な存在、それがグレイ・ラビットの圧倒的な

人気の秘密であるらしい。

村のお店のドアに掛かっているベルを何とか手に入れようとして、大騒動を引き起すスクワールの武勇伝も加わったりして、グレイ・ラビットは無事尻尾を取り戻すことができ、桜草のワインも上手に仕上がった。こうして全てが幸せな結末をむかえるという、明るい春の季節の雰囲気を伝える田園物語である。テンペストの挿絵が全部で 21 枚使われている。

3. 『ヘアーの大冒険』 (*The Great Adventure of Hare*, 1931)

体ばかり大きく、うぬぼれがつよいが、からきし意気地のない野うさぎヘアー、何とも憎めないその言動は、幼児そのものである。「グレイ・ラビット物語」で、このヘアーがすぐに欠かすことのできない主人公となることも、容易に理解できるところである。

『ヘアーの大冒険』の冒頭は次のように始まっている。

It was a lovely midsummer morning, and Hare looked out of his bedroom window on to the fields where cloud shadows were running races. Gentle blue butterflies and fierce little wasps flew among the flowers in the garden below. Hare stroked his whiskers and said “Just the day for my adventure.”

“Grey Rabbit, Grey Rabbit, come here,” he called over the banisters, “and bring my waliking-stick, will you?”⁵⁾

何やら思惑のありそうなグレイ・ラビットは、ヘアーの旅の仕度を甲斐甲斐しく手伝っていた。上着の後ろに着いている真鍮のボタンを磨いてぴかぴかに光らせ、オニナベナのブラシで服を綺麗に整えている。そんな時も、この二匹のうさぎの大きさの違いが、正確に描き分けられているのが分かる。すなわち、「ヘアーの肩に届くためには、彼女は爪先で立たねばなりませんでした。そんなに小さかったからです。」(She had to stand on tip-toes to reach his shoulders, she was so small.)⁶⁾と述べられているからである。グレイ・ラビットの思惑、それは、ヘアーの留守中に夏の大掃除をしなければということだった。

のん気なヘアーは、途中で昼寝をしたり、赤い上着をきたおしゃれなキツ

ネ紳士と話したりして、アッシュ・ウッドに住むもう一人の賢人、ヒキガエル（Toad）の所にやって来た。帰りにヒキガエル老人がくれた数々のお土産の中でも、彼の有名な毒液が、その後ヘアーの命を救うことになる。御自慢の上着とチョッキをキツネ紳士に取り上げられ、一緒に陣取りゲーム（‘noughts and crosses’）をさせられたりしているヘアーの大きな図体は、やっぱりどこか滑稽で憎めない。命が危うくなるところで、ヘアーは毒液をキツネ紳士にかがせ、ほうほうの体で逃げ出すことができた。しかし、皆の恐れるキツネ紳士と陣取り遊びをした野うさぎヘアーというのは、動物たちの間で、一躍英雄になってしまったのだった。異様な臭気を発するキツネの恐ろしさにも気がつかず、すいかずらやマージョラムの匂いで、何とか誤魔化そうとするヘアーのいい加減さには閉口するが、考えてみるとそんなところが彼の身上でもあり、苦笑と共に読者の共感を誘うところでもあろう。

添えられたテンペストの挿絵は、全部で 24 枚である。

4. 『はりねずみのファジベッグのお話』 *The Story of Fuzzypeg the Hedgehog*, 1932)

牛乳屋のハリネズミ父さん（old Hedgehog）一家は、仲のよい家族である。一人息子のファジベッグ坊やの愛らしく、子どもらしい言動は、この「グレイ・ラビット物語」でも何回も繰り返し使われるエピソードになっている。中でも、優しいグレイ・ラビットを慕うファジベッグ坊やの幼い思いは、一際深い印象を与えるものである。その一途な思いに応えるかのように、彼は、グレイ・ラビットの一番のお気に入りでもある。この小さな主人公が活躍する最初の物語は次のように始まっている。

Early one summer morning, when the white mist lay over the fields like a soft blanket, old Hedgehog uncurled himself and rolled out of bed.

“Don’t wake Fuzzypeg,” called Mrs Hedgehog, warningly, as he rubbed his bruised shin, and struggled with a sheet which was all mixed up with his prickles.

Hedgehog managed to get unravelled without spoiling the leaf-linen sheet of which Mrs Hedgehog was so proud. He stooped over Fuzzypeg, who lay curled up in bed, a small ball of prickles.

“He’ll be a grand fellow when he is grown up,” said he to his wife.⁷⁾

針に関する記述の部分抜きせば、一見どこにでもあるような、仲の良い人間一家の朝の一場面を思いおこさせるところであろう。

今日は息子ファジベッグの誕生日、行く先々で父さんは、「遅れないでくださいよ。朝食は6時ですよ。」という夫人の言葉を思い出して、仕事を急ぐのだった。坊やは、今日一歳になってばかりだった。友人の動物仲間から、様々のプレゼントをもらうファジベッグ。でも一番の贈り物は、父さんからのホタルかごの贈り物である。白いかごに入れられた二匹のホタルは、夕闇の中で、神秘的な光を放っている。美しく平和な、夏の宵のことである。

さて、元気が良く、好奇心の固まりのようなファジベッグ坊やは、冒険のし過ぎで迷子になり、とうとう農家の庭で植木鉢をかぶせられ、囚われの身となってしまった。大騒ぎで捜索する仲間たちの努力で、翌日無事に、坊やは救出されるという事件が語られている。この物語には、お馴染みの賢者フクロウ、もぐらのモルディー・ワープ、ねずみのラット、めんどりのスペクトルディー・ヘン、嫌われ者のてんのストウト、そしてファジベッグの従兄弟のはりねずみティムとビルなども登場し、ほとんど「グレイ・ラビット物語」シリーズで活躍することになる全員が勢ぞろいしていることが分かる。

そんな動物仲間の間でも、野性の動物と飼われている動物とでは、はっきりした区分がなされている点は、興味深いところであろう。ファジベッグの居場所を尋ねて、偵察を重ねる賢者フクロウの問いに答えて、農家の飼犬は、「ええ、見ましたよ。でもねえ、奴についちゃ、何一つ申し上げられませんか。私はこの家のものですし、あなたは森のお方ですからね。」というのである。この、“I belong to the House, and you belong to the Wood.”⁸⁾という帰属意識は、動物ながらもなかなかあつぱれと言えるだろう。人間に養われている動物の、モラルのようなものさえ感じられるところである。

使われているテンペントの挿絵は、全部で21枚である。

アリス（アリソンの本名）の文学への関心は、教師としての資格を得るために、ケンブリッジ大学で一年の訓練コースを取っていたときから始まったといわれている。ロンドンで3年間、女子中学校で教えた後、1911年にジェームス・アトリーと結婚し、一人息子のジョンを生んでいる。「グレイ・ラビット物語」の誕生にあたっては、このジョンが寄宿学校に入り、いつもの物語の聞き手を失ったことが大きく影響していたようである。息子と共有し

ていた、あの田園を背景にして動物が活躍するお話しを書いてみようという思いが、執筆の一つのきっかけとなったからである。

自分の中に溢れてくる自己表現への欲求が、幼いときからアリスを強烈に捕えていたことは事実であった。けれどそんなことをしたら、人に笑われはしまいかという彼女の自意識もまた、人一倍強いものであったことがうかがわれる。自分に一体なにが書けるのだろうかと思い惑う彼女の到達した結論が、「あの幼年時代の思い出ならば書けるかもしれない」という確信であった。このようにして、アリスは「半ば閉じられた金色のパンドラの箱の蓋の間から」⁹⁾あふれ出した、自分の子ども時代に見たり経験したりした自然の風物を材料にして、数々の物語やエッセイを書いていったのである。

このようにして、「グレイ・ラビット物語」の第一稿は、ハイネマン社に受け入れられ、作者アリソン・アトリー、M. テンペストの挿絵入りで出版されることになった。当時、テンペストの評価はすでに高く、ハイネマン社の条件は、一冊目の出版にあたって、作者アトリーには 10 ポンド、そして挿絵画家テンペストには 15 ポンドを支払うというものであった。最初からビアトリクス・ポターの仕事を意識していたアトリーは、「この物語には、挿絵が大切です」とハイネマン社への手紙で述べている。そしてすぐに、ドロシー・ハットンという挿絵画家を推薦した。それにもかかわらず、ハイネマン社はテンペストに挿絵を依頼し、しかも作者であるアトリーよりも高い評価を彼女に与えたのだった。このことが、誇り高いアトリーにとっての屈辱の手痛い思い出となり、テンペストとの後の紛争の種となっていったようである。一方本の評判は高く、ハイネマン社から連続して、アトリーとテンペストの共同作品の 4 冊の「グレイ・ラビット物語」が出版されることになった。

しかし、第五作目の『スクワール、スケートに行く』(*Squirrel Goes Skating*) は、1934 年にコリンズ社から出版されることになるのである。本の売行きの良さと評判の高さにもかかわらず、ハイネマン社が執筆料を据え置いたことが、大きな原因の一つであったらしい。以後 1975 等の『ヘアーと虹』(*Hare and the Rainbow*) まで、31 冊の「グレイ・ラビット物語」がシリーズものとして、このコリンズ社から、刊行されてゆく。しかしながら挿絵担当のテンペストとの関係は、1951 年の T. V. 放映頃から、陰悪を極めるようになった。物語があつての挿絵と主張するアトリーに対して、視覚イメージの影響力の大きさを強調するテンペストが、彼女の要求を一步も譲ら

なかったからである。しかしアトリーは、1970年に出版された『リトル・グレイ・ラビット、北極に行く』(*Little Grey Rabbit Goes to the North Pole*)からの5冊の作品を、テンペストの健康が衰えたことを理由に、キャサリン・ウィグルワース(Katherine Wiggleworth)という新しい画家を推薦して刊行している。アトリーの心酔者であったウィグルワースは、確かに彼女の言いなりになっての仕事をしたではあろうが、既に読者の間で定着していたテンペストの画風を忠実に模倣するに留まり、いかんせん二番煎じの挿絵であったことは否めない。この他にもアトリーの死後、ハイネマンが版權を所有している最初の4作を合本の形でまとめた版に、フェイス・ジェイクス(Faith Jaques)が挿絵を添え、『グレイ・ラビットのお話』(*Tales of Grey Rabbit*, 1980)として出版されている。しかし、これとても同様に、テンペストの挿絵の印象が余りにも強かったためか、そのリアルな描写には何となく親しみが感じられず、違和感が残ってしまうのである。テンペストの描くグレイ・ラビットの印象は、これを越える挿絵はこれから先も出にくいと思われるほど愛らしく、暖かで、平和なイギリスの田園の雰囲気満喫させる傑作となっている。

このように、「グレイ・ラビット物語」は、ビアトリクス・ポター(Beatrix Potter: 1866-1945)の『ピーターラビットのお話』(*The Tale of Peter Rabbit*, 1902)や『リスのナトキンのお話』(*The Tale of Squirrel Nutkin*, 1903)等と並ぶイギリスの動物ファンタジーの傑作として、様々な形式をとって出版されてゆくロングセラーとなった。その変遷の様を考えてみるのも大変興味深い点であるが、ここでは、挿絵とテキストの関係という問題に限って、一つの事実を紹介してみようと思う。

「グレイ・ラビット物語」を引き継いだコリンズ社は、1934年から1975年に至る41年間に、30冊の物語と一冊の劇を出版している。そのうち、最初の26作品の挿絵はテンペストが、そして最後の4作はウィグルワースが担当した。しかしながら、終始変わりなく採用されていたのは、縦17.5cmと横14.5cmの四角い判型と色をそれぞれに変えた一色刷りの上に、丸型または四角にくり抜かれた窓のように、テンペストの絵がはめられているという表紙の装丁であった。すなわち、初版発行の際テンペストの提案した本づくりの方法がそのまま踏襲され、読者にお馴染みの「グレイ・ラビット物語」絵本の定番となっていたのである。挿絵の挿入も、毎ページに絵が入るとい

うのではなく、中には文字ばかりのページもあり、あくまでも物語に添えられた絵という限度が終始保たれていて、それがまたボターの動物ファンタジー絵本との違いともなっていた。しかし、1986年、度重なる再版の結果、絵の原版が摩滅したことを理由にコリンズ社が新版を発行したとき、「グレイ・ラビット物語」シリーズは、この形式をすっかり変えてしまったのである。まず、この新版の表紙がF. オーエン (Fiona Owen) の手によって、それぞれ小さなりボンや本のパターン等を編み込んだレース模様の印刷の中に、絵が埋め込まれるという装丁に変えられてしまっている。また中の様子にも変化がみられる。まず第一に気がつくのは、中表紙から、森を背景に描き込まれた小さな家の風景が消えてしまっていることであろう。また物語全体が始まる冒頭の文字には、それぞれM. クーパー (Mary Cooper) が装飾した飾り文字が用いられており、しかも全体にわたって、毎ページに絵が入れられるようになっているのである。挿絵が増えた分だけ、当然文章が後退し縮小されている。シリーズ全体のそれぞれの本を画一化して、だいたい50ページ程度の絵本に仕上げるための、物語部分の縮小である。中でも目立つのは、初版の『フクロウ賢者のお話し』(*Wise Owl's Story*, 1935)の108ページが、新版では半分以下の48ページに縮小されてしまっていることであろうか。視覚イメージ優先の時代においては、作者と画家の力争いにも自ら、勝負がついてしまったという感がある。削られた箇所が、まさに作者アトリーが物語を書く際に終始こだわり続けていた、「忘れ去られてしまうかもしれない、本当にイギリスらしい田舎の暮らしの雰囲気を書き留めようと、いつも試みていた」(I always try to give some specially English touch of country life, which might be forgotten.)¹⁰⁾ところであることが何とも痛ましい。これもまた、「グレイ・ラビット物語」の国際的な人気の故に失われてゆこうとしている、ローカルなものの持つ魅力への郷愁の一つであろうか。しかしながら、このような変化に対する反動として、昨年1992年、ハインマン社から、最初の4冊の「グレイ・ラビット物語」が、初版と同じ形で復刻出版されているのは喜ばしいかぎりである。その一冊、一冊を手にとるとき、最初の作品を世に出そうと必死に模索し、お互いに張り合って、より良いものをとそれぞれが競いあった作者と画家、二人の芸術家の緊張と自信の様が、確かなものとして伝わってくるからである。

アリソン・アトリーという一人の作家にとっても、処女作出版にあたって

の緊張と不安と期待に満ちたこの一時期は、生涯忘れられないものとなったと思われる。それは、翌年 1930 年の夫ジェイムズの不慮の死、そして愛する一人息子ジョンとの不和の日々を迎えるにあたっての、最後の喜びの思い出につながるものだったからである。彼女は、「グレイ・ラビット物語」出版からおよそ 10 年後の日記に、次のように書きとめている。

I think of lovely days, James and Jhon and I . . .
feasting, laughing, dancing round the table when
my Squirrel, Hare and LGR was taken.

ALISON UTTLEY, diary, 3 September 1938¹⁾

物書きという、栄光と悲慘に満ちた生涯をたどることになる一人の女性の、矛盾に満ちたそれからの実生活での日々を思うとき、まことに複雑な気持ちにとらわれる。彼女は、自分の私的な喜びや郷愁や憧れの全てを、この幸せな動物ファンタジーに閉じ込めて生きていったようにさえ感じられるからである。

アトリーの動物ファンタジーは、そんな意味からも、永遠にこの世のものではない、一種の「フェアリーテイルズ」（「妖精物語」）であると言える。

注

- 1) Alison Uttley & pictures by Margaret Tempest, *The Squirrel, The Hare and The Little Grey Rabbit* (London: William Heinemann Ltd., 1929), pp. 3-4.
- 2) *ibid.*, p. 63.
- 3) Alison Uttley & pictures by Margaret Tempest, *How Little Grey Rabbit Got Back Her Tail* (London: William Heinemann Ltd., 1930), p. 62.
- 4) *ibid.*, p. 3.
- 5) Alison Uttley & pictures by Margaret Tempest, *The Great Adventure of Hare* (London: William Heinemann Ltd., 1931), p. 3.
- 6) *ibid.*, p. 5.
- 7) Alison Uttley & pictures by Margaret Tempest, *The Story of Fuzzypeg The Hedgehog* (London: William Heinemann Ltd., 1932), p. 3.
- 8) *ibid.*, p. 49.

- 9) Alison Uttley, 'My Early Writing', *The Button-Box* (London: Faber & Faber Ltd., 1968), p. 15.
- 10) Denis Judd, *Alison Uttley : The Life of a Country Child* (London: Michael Joseph Ltd., 1986), p. 99.
- 11) *ibid.*, p. 92.